

Л.Н.トルストイの主人公達におけるルソー的自然の諸相 ——『コサック』, 『アンナ・カレーニナ』より——

覚 張 シルビア

レフ・トルストイ (1828–1910) はジャン＝ジャック・ルソー (1712–78) の思想的継承者、崇拜者として知られているが、彼は、1980年代に思想的転換を経験した後も、ルソーに対する立場を覆すことはなかった。トルストイが14歳から20歳の間に読書を通じて感銘を受けた作品のリストには、ルソーの作品が3つ記されている。作家に絶大な影響を及ぼしたものとしては、『山上の垂訓』, ルソーの『告白』と『エミール』, ディケンズの『デイヴィッド・コパーフィールド』が挙げられている。ルソーの『新エロイーズ』, スターンの『感傷旅行』, プーシキンの『エヴゲーニー・オネーギン』, シラーの『群盗』, ゴーゴリの『死せる魂』, ツルゲーネフの『獵人日記』, ドゥルジーニンの『ポーリンカ・サックス』, グリゴローヴィチの『アントン・ゴレムイカ』, レールモンツの『現代の英雄』, 『タマーニ』は、トルストイに非常に大きな影響を与えた作品として、このリストに載せられている。¹ このリストを見るだけでも、トルストイは若き日に、ルソーの洗礼をすでに受けていたことが分かる。晩年の1901年には、ポール・ボワイエに次のように語っている。「私は、ルソーの作品をすべて、音楽辞典を含めて全20巻読了した。私は、彼に感嘆するというのでは飽き足らず、彼を神格化した、私は、15歳の時に、肌につける十字架の代わりに、彼の肖像入りの首飾りを身に付けていた。彼の物した多くのページが私にあまりに身近なので、私が自分で書いたのではないかと思われる程だった。」²

トルストイはルソーを師と仰ぎ、彼の日記や手紙には、『告白』, 『新エロイーズ』, 『社会契約論』, 『エミール』, 『サヴォワ人助任司祭の信仰告白』等からの引用も認められる。トルストイはL.スターン (1713–68) から文学手法を学び、³ ルソーからは教訓的・教育的側面を学んだといわれるが、後者からは、何よりも生活の次元において多大な影響を受けた。

このように、ルソーがトルストイの精神に対して影響を与えたことは明白な事実であり、それについてはしばしば言及されるにもかかわらず、文学的次元においては、彼らの影響

¹ Бирюков П.И. Биография Л.Н.Толстого. Кн.1. М., 2000. С.83.

² Paul Boyer, *Chez Tolstoy* (Paris:Institut D'Études Slaves De L'Université De Paris, 1950), p.40.

³ トルストイは、文学手法を学ぶ修練の一貫として、スターンの『感傷旅行』を英語からロシア語に翻訳する試みを行っているが、完成はしなかった。

関係について、一般的かつ断片的な指摘があるにとどまっている。

M.コヴァレフスキーはルソーのトルストイに対する影響を軽視しており、彼の著述や思索に対するルソーの影響の重要性を否定する批評家もいる。また、影響の重要性の程度についても、批評家の間では意見の一致がみられていない。A.ジヴィロフスキーは、ルソーの影響は一定の時期に限って存在するとみなしているが、I.ベンルビは、トルストイのうちに19世紀のルソーを見出そうとしている。A.B.ルナチャルスキーは、作家・哲学者としてのトルストイはルソーの完全なる弟子であり、宗教的思想家としてのトルストイの作品には、ルソーに由来しない論調など一つもなかったと主張する。V.ズボリレックは、論説やエッセイ、短い文章の一節やトルストイの伝記作品の引用文、またおそらく彼の個人的著作に関する議論においては明白に見られる二人の影響関係に対して、より大きな関心が払われていないことに、驚きを禁じ得ないでいる。1928年にパリで出版されたM.I.マルコヴィッチの博士論文『ルソーとトルストイ』はこうしたテーマでは比較的大きなものであるが、この論文の関心は、社会・政治思想といった非文学的な類似関係に向けられている。⁴ V.ズボリレックは、ルソーの思想がトルストイに与えた印象が、彼の文学作品のうちにどのように反映しているか、『幼年時代』を含む初期3部作から『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』に至る作品を中心に検証している。しかしながら、ルソーの思想は、トルストイの作品において道徳的様相を色濃く帯びるため、文学作品に題材を取りつつも、文学的観点というよりは道徳的観点からの比較になっていることは否めない。『若きトルストイとルソーの「不平等起源論」』において、C.アンシュエツは『幼年時代』と『コサック』との間で、『不平等起源論』の受容のあり方に変化が生じたことを論じている。この論文では、トルストイの創作過程における自然と社会との関係の変遷についての言及も見られるが、結論部分で概略的に述べられているに過ぎない。

ゼンコフスキーが指摘するように、⁵ トルストイのうちに現われたルソー的要素が、すべてルソーから継承されたものだとは限らない。すでにトルストイのうちに芽生えていた思考形態、自然の欲求とでもいべきものが、偶然にルソーの思想と共鳴したということもあり得るだろう。直接的な影響、時代の潮流による間接的な影響、偶発的な類似関係をより深く知るためには、両者の作品をテキスト空間において比較することが不可欠となる。トルストイがルソーから最も大きな影響を受けたのは、その自然観であるといえるが、そのトルストイによる受容については、テキスト上での分析が不十分であると言わざるを得ない。『幼年時代』から『ハジ・ムラート』に至るまで存在する社会、人間の無分別な行

⁴ Vladimir Zborilek, "Tolstoy and Rousseau: A Study in Literary Relationship." Ph.D.dissertation in Slavic languages and literature (University of California, Berkeley, 1969), pp.1-2.

⁵ Зеньковский В.В. История русской философии. Т.1. Париж, 1948. С.395.

動と自然との二項対立は、ルソーにまで遡る。⁶ トルストイの自然に対する賛美と文明や上流社会の文化に対する嫌悪が、ルソーから継承されたことについては、しばしば言及されている。И.В.ルキヤネツによれば、ルソーとトルストイは、道徳的、善良で自由でありながら、決して単純ではない人々を中心に描くという、極めて困難な文学的課題を解決した。⁷ このような人物が、複雑かつ興味深いのは、彼らの性質が、自然や文明という環境の影響によって変容するためだと考えられる。しかし、自然や文明が人間に及ぼす影響という点においては、トルストイとルソーの関係について、十分な言及が成されていない。本論では、文明社会において生活する人間に対して自然が作用するプロセスという観点から、トルストイとルソーの関係を文学的次元で理解することを目的とする。

1. ルソーの自然とトルストイの自然

ルソーは、人間は自然的に善であり、社会が彼を悪くした、ということを証明するために、人類や個人の歴史を過去に遡り、未だ人間が社会を作っていない状態に到達し、そこから逆に現代を眺め直し、悪の起源を突き止め、社会や個人の諸問題を解決する方法をとった。『人間不平等起源論』(1755)では、人類の歴史を過去に遡り、人類が未だ社会を作らず孤立して生きていた自然状態が仮設され、『エミール』(1762)では、子供は生まれると同時に、否、それ以前から、社会のあらゆる影響を受けぬように配慮され、理性の権化とも言うべき教師以外の誰とも接触せず、言わば孤立した存在として出現する。

このように、現状判断のために自然状態に遡り、そこから現代社会を見直して批判する方法は、ルソー独自のものではなく、18世紀フランスのフィロゾフ(哲学者)達に多かれ少なかれ共通のものであった。

だが、ルソーの説く自然状態は、当時のフィロゾフ達が説く自然状態とは異なるものであった。ルソーは、『不平等起源論』の中で、社会の基礎を検討した哲学者のうち、誰一人として自然状態には到達しなかった、と主張している。彼らの描いた自然状態は、ルソーにとっては社会状態であるに過ぎず、もっと先に進まなければ、社会状態以前の状態で人々が一人一人存在していた自然状態に辿り着くことはできないというのだ。だが、実際には、ルソーのいう自然状態が現実に存在するとは言い難く、歴史を過去に遡って極限に達した所で更に一步を踏み出した、全くの仮設的世界の状態であった。

ルソーは自然状態にいくつかの段階を考えるが、その最も根源的な状態には、ホッブズの考えるような万人の万人に対する戦いもなければ、自然社会も存在しない。ホッブズは、ルソー的観点からは自然状態まで到達しなかったのであり、彼の自然状態は社会状態の元

⁶ Лескис Г.А. Лев Толстой (1852-1869). М., 2000. С.183.

⁷ Лукьянец И.В. Л.Н.Толстой: «Читаю Элоизу» // Русская литература. 1998. №3. С.181.

の姿でしかないのであって、自然状態は更に先に在るのである。⁸

ルソーは、人間はその本質において、つまり自然状態においては善であり、それが社会的進歩、文明の発達によって悪へと墮落したとみなしている。トルストイは、人間は本質的に善であり、それが文明によって墮落したというルソーの考えを共有している。トルストイとルソーはいずれも自然人の善性という点では共通の前提に立っていたのだが、そこから得られる結論は異なっていた。ルソーは、『社会契約論』(1762)の中で、個人と社会との間に一定の調和を回復すべく、社会制度を変革する試みを行ったが、トルストイがこうした方向性の試みを行うことはなかった。彼は、ルソーのように、人間が文明によって生み出される人工的の必要に従属することで不幸になり、人間はその原始的な自然状態に戻らなければならない、人間の状態を改善するという試みは、現代社会の制約の中で個人の自由を拡大することに限られる、とは思っていなかったのである。トルストイにとって、自然人とは永遠に善良で、誠実、そして健全である。社会からはただ悪のみが予期され得るが、人間は社会からより遠くに離れていればいる程、健康で誠実で、善良なのである。⁹

田中未来は、従来のルソーの「自然」に関する解釈、分類に基づき、『エミール』の自然を五つに分ける。第一は、外界の「自然」、すなわち人間をとりまく人間以外の環境としての自然、第二は人間の本性としての自然、第三は人間の発達の原動力となり、発達を導き、これを方向づけるものとしての「自然」である。第四は「社会状態」の対立概念としての自然状態、第五は「神」という意味に近い、「自然」という表現である。¹⁰

トルストイにおいては、外界としての自然は、しばしば文明社会と対比的に描かれる。本性としての自然は、特に『戦争と平和』において、ナターシャ・ロストワのうちに見ることができ、この自然を歪める社会制度の陰影は、クラージン家の者達のうちに見ることができる。「神の創りし世界すべて」＝「全自然」が自分を通してマリヤーナを愛すると感じるオレーニンは、「神」と「自然」の近似性を感じている。

このように、トルストイが描く「自然」とルソーの「自然」は多くの点で共通している。以下では、『コサック』のオレーニンと『アンナ・カレーニナ』のレーヴィンのうちに見出されるルソー的な「自然」に焦点を当てる。

2. 『コサック』(1852—1862) ——旅行者と散歩者の自然

大学を中退し、放蕩に身を任せた生活を送っていたトルストイは、1851年4月の末、

⁸ 沼田裕之『ルソーの人間観：「エミール」での人間と市民の対話』風間書房、1980年、37-41頁。

⁹ Alexander P. Obolensky, "The Confession of a Natural Man," in Constantine Belousow, ed., *Leo Tolstoy* (New York: The Association of Russian-American Scholars in USA, 1978), pp.222-230.

¹⁰ 田中未来著『「エミール」の世界』誠文堂新光社、1992、30-50頁。

兄ニコライの勧めにより、共にコーカサス地方へと出発した。モスクワでの社交界における生活に別れを告げ、コーカサス地方に出发する『コサック』の主人公オレーニンには、トルストイの伝記が色濃く反映している。スタログラトコフスカヤ部落に到着したトルストイは、「一体、感情を伝えることができようか？自然を目にした時の自分の眼差しを、どうにかして他者に注ぎ移すことができないものだろうか？」¹¹と日記に記している。

モスクワからコーカサスへとやって来たオレーニンも、自然に囲まれた環境の中で、これまで抱くことのなかった感情を経験することになる。旅の過程では、モスクワからの距離が増大すればする程、自然の力の影響下に入り、自然と同一化していく。それは、オレーニンがこれまで属していた文明社会に対して抱き始めた嫌悪感にも窺える。

人々が粗野であればある程、文明の徴候が少なれば少ない程、彼は自分がより自由であるのを感じた。彼が通過することになっていたスタヴローポリは、彼を悲しませた。¹²

また、オレーニンが文明社会から脱しつつあり、より大きな生の次元に到達しつつあることが、周囲に対する関わり方の変化に見て取れる。

オレーニンには、何もかもが、より愉快で楽しく感じられた。コサックや御者、駅長は皆、誰がどんな階級に属しているかということは考えずに、気楽に冗談を言ったり対談をしたりできる、素朴な人々であるように思われた。皆が、オレーニンにとっては意識せずして愛おしく感じられた人類に属していたのであり、誰もが彼に対して好意的であった。(6, 13)

オレーニンは、自然環境に置かれることで、文明という社会状態と対立する自然状態へ移行し、さらには、人間の本性としての自然を回復する。この旅の過程で期せずして人間存在のより原始的本質へと回帰し、それによって現代文明に対する否定的な見方を獲得する。オレーニンの内部で起こったこの精神的プロセスは、18世紀フランスのフィロゾフ達に特徴的な手法、つまり、現状判断のために自然状態に遡り、そこから現代社会を批判する手法と共通している。ただ、ルソーの場合には、『エミール』において意識的に、知的必要としての自然状態を仮設するのに対して、『コサック』においては、それが旅という極めて自然な行為によって、無意識にこのプロセスが生じている。また、『エミール』においては、意図的に人間関係の範囲を狭めることによって自然状態を保とうとしているが、『コサック』においてはその必要がなく、旅という特殊な生活条件が人間関係を自然状態へと近づけていく。とはいえ、ここでいう自然状態とは、人間が他者との関わりを持つ以

¹¹ Апостолов Н.Н. Живой Толстой. М., 2001. С.46.

¹² Толстой Л.Н. Полное собрание сочинений в 90 томах. М.,1928-1958. Т.6. С.12-13. これより先、本稿におけるトルストイの著作の引用は、(巻数, 頁数)で示す。

前の孤立した状態ではない。むしろ、それぞれの孤立した人間が、何かより大きな全体の一部を成し、互いに融合した関係にある。オレーニンは、「素朴な人々（простые люди）」と接することで、階級による障壁のない「人類（род человеческий）」の一部であることを感じている。トルストイにとって、環境としての自然は、単に、社会から孤立して人間の自然状態を維持するための場所ではない。自然とは、文明社会から人間を守る防壁ではなく、積極的に人間に働きかける活動分子なのである。オレーニンの回想や夢想には、「荘厳なる自然の厳かな感覚が入り込み」、社会生活では起こり得なかったことが生じる。ルソーにおいては、自然状態では生じ得ないことが社会状態で生じてしまうのであり、それを回避するためには自然状態に人間を置くことが不可欠となる。トルストイにおいて、特に『コサック』の世界では逆に、社会状態においてあり得ないことが、自然状態において可能となる。その働きの積極性、消極性という観点から見た場合、ルソーにおける自然とトルストイの自然とは、対極的な位置を占める。その意味で、自然状態を社会から守ろうとしたルソーは、実は自然の弱さを認識し、自身で自然に対する限界を設定していたのではないか。それに対してトルストイは、自然に無際限の力を与えている。社会状態においては常に自分だけを愛し、真実の意味で女性を愛したことの無いオレーニンが、コーカサスの地では、マリヤーナという教養もなく、社交界に相応しくない女性に対して愛情を抱くことになる。オレーニンの価値基準から、社交界という社会状態は脱落し、代わりに自然との緊密性という新たな尺度が現れたのだ。それゆえに、マリヤーナに対する愛は特異な性質を有するものであった。

彼はマリヤーナを眺め、そして山と空の美しさを愛すると同じように彼女を愛していた（そ彼には思われた）。彼女と何らかの関係を持つとは、思いもよらなかった。(6, 89)

ルソーは、エミールが女性と理想的な関係を結ぶことが可能となるよう、エミールにはホメロスの『オデュッセイア』を、相手の女性となるべきソフィにはフェヌロンの『テレマークの冒険』を読ませた。完全な自然状態は存在し得ないと考えるルソーがこのような手段に訴えたのは、言わば当然のことである。トルストイがオレーニンをして愛させたのは、山や空という環境としての自然と同等に描かれるマリヤーナのうちにある自然的本質であった。ルソーは現実の社会状態のうちに虚構の自然状態を作りだそうとした。それに対してトルストイは、『コサック』において、虚構の愛しか生じ得ない社会状態から、真実の愛が可能となる自然状態へと、オレーニンを突き動かしていったのである。つまり、真実性、虚構性という観点からも、トルストイとルソーにおける自然状態と社会状態とは、対極的な位置を占めていることが分かる。

トルストイとルソーにおいて、環境としての自然の力に大きな差異があるのは、彼らの

描く人物達の自然に到達する経緯、また自然の性質そのものの違いによるのであろうか。『コサック』において、オレーニンは、自然空間へと入るために長距離の旅に出る。旅の過程においては、文明空間から自然空間へと向かう変化が徐々に現れるものの、旅のある時期からは、心は遙か目的地へと、まだ見ぬ未来へと向かっている。ルソーは、1753年、ディジョンのアカデミーが世に問うた懸賞論文の論題「人々のあいだにおける不平等の起源はなにか、それは自然法によって正当化されるかどうか」という問いに答えるために、家族や友人を連れてサン＝ジェルマンへと旅し、森の中で原始時代の面影を求めた。ルソーにとっても自然こそは正しい答えを与えてくれる場所であったのだ。しかしながら、オレーニンが社交生活を逃れ、自身の欠点をも免れて、何か新しいものを得るために、大きな距離を越える必要があったのに対して、ルソーには、すぐそばにある自然で十分であった。さらには、自然との交感から得られるものも、旅と散歩の規模の違いと呼応しているようである。『コサック』の自然は、圧倒的な力をもって人間に作用する。

彼が自分と、山々や空の間を隔てる遙かな広がり、山々の巨大さのすべてを理解した時も、この美の無限性のすべてが感じられた時も、彼はこれが幻想では、夢ではないかと恐れおののいた。(6, 14)

このような自然の光景には、人の心を揺り動かし、別次元の世界を開く力がある。

一方、ルソーにおいては、すでに触れたように、自然は、心を外界から隔てて自然状態を生み出すための手段でしかない。ルソーは散歩だけではなく、旅をも好んだが、この旅はいかなる性質を備えていたのだろうか。『告白』(1765-1770 執筆, 1782-89 刊行)では、金銭的な事情もあって徒歩で旅するルソーの姿がしばしば描かれる。ヴァランス夫人の勧めに従って、改宗するためにサヴォアからイタリアへと向かったルソーは、アルプスの山を越える。山々と広大な自然の景色は、コーカサスとアルプスが共通して持つ特色であろう。だが、このような大自然の中を旅していても、ルソーのうちに紡ぎ出される心象は、旅行者というより散歩者に属する、というべきである。『告白』の主人公は旅が終わることを望んでおらず、旅の目的地へと思いを馳せることで楽しい夢想到に耽ることは殆どない。むしろ、徒歩だからこそ経験可能な、身近な自然との交感の一瞬一瞬を楽しんでいるかのようだ。イタリアから帰る途上も、懐かしいヴァランス夫人に近づくに従って胸は鼓動したが、そのために旅の楽しみを犠牲にして目的地へと歩調を早めることはなかった。

『コサック』で描かれる大自然の威容、そこから受けたオレーニンの印象は、トルストイ自身がコーカサスに赴いた時の強烈な印象と重なり合う。¹³ 自然とは、トルストイにと

¹³ Толстая А.Л. Отец. Жизнь Льва Толстого. М., 1989. С.51.

ってもルソーにとっても、心に働きかける重要なものであったが、その捉え方は一様ではなかった。トルストイにとってコーカサスの自然が非日常であったのに対し、ルソーにとって、アルプスの自然は、日常的楽しみを増大させてくれるものであったのだ。

『コサック』においては、威圧的で美しい自然が描かれているが、トルストイはコーカサス地方の魅力在即座に理解したわけではない。日常的なコーカサスの情景は、トルストイがプーシキンやレールモントフの初期の詩から知っていた国や、A.A.ベストゥージェフ・マルリンスキーの小説に見られるような、過剰なまでに鮮やかな国とは似ても似つかないものだった。この地域独特の美しさ、その住人達の多様で強固な性格を知るには、トルストイにも時間を要した。彼は、コーカサスの土地や人々のうちにインスピレーションの源を見出すロマン主義を受け入れることはできず、『侵入』（1852）においては極端なロマン主義と論争した。だが、それにもかかわらず、彼は、前任者達を魅了した多くの主題を継承した。その一つが、文明の果実をかみしめ、絶望した人物が、自由と幸福を損なわれていない自然のうちに求め、また、この自然と同じように自然な風俗を求めるという「逃亡者」の主題である。この主題は、『コサック』の中心的テーマとなっている。¹⁴

しかしながら、旅には自然とは相対立する文明という概念が伴うこともある。例えば、スタンダールは『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』という本の中で、イギリス人旅行者を批評の対象にしている。

それら〔公園—著者〕が常にロシア人とイギリス人であふれているのが気に入らない。600人は下らない。フィレンツェ——それは外国人で一杯になった博物館だ。彼らはそこに自分達の習慣を持ち込むのだ。イギリス式カースト制度やそれを遵守する時のこやかましさは、無教の滑稽な話のテーマとなっている。¹⁵

トルストイの『リュツェルン』（1857）においても、貧しい歌い手を嘲笑して施しもしないイギリス人旅行者の姿を描くことで、文明批判が成されている。ある意味では、オレーニンはコーカサスの地に文明を持ち込んだことができる。マリヤーナが二人のロシア人に心移すことはなかったが、それは、文明的存在を前にした時の自然の不屈さを物語っている。文明的存在であるオレーニンは、コーカサスの地で自然の優越性を理解し、自身もそれに調和することを望んだが、最終的には異邦人としての自己の存在を再認識するに到った。

他方、大自然の中で旅しながらも、散歩のような身軽さで歩くルソーは、自然に対する距離を感じていないかのようだ。旅か散歩か、ということには、旅をする、或いは散歩を

¹⁴ Гулин А.В. Лев Толстой и пути русской истории. М., 2004. С.13.

¹⁵ Зенкин С.Н. Французский романтизм и идея культуры. М., 2002. С.193.

する人物の自然に対する距離感が反映している。「ルソーの場合、自然はいつも彼の内面の投影であり、同じジュネーヴ生まれの文学者アミエル（1821～81）のように、『風景は我が心の状態』¹⁶であるのなら、ルソーと自然との距離はよりよく理解できる。ルソーと自然との距離は小さいばかりか、むしろ、ルソーにとって自然は内在的だというべきである。それに対して、オレーニンは、自然が新しい息吹を吹き込んでくれることを期待しており、その意味では外在的な自然が『コサク』に描かれている。自然との距離は社会状態との距離に反比例するといってもよい。ルソーは、貴族のサロンに出入りし、ディドロ、ダランベールなどのフィロゾフ達と交際を始めた頃、社交界の雰囲気と同化しようと努力していたといわれる。この時に、彼が後に貴族社会を、他人の意見が支配し、人々が存在を喪失し、自分を見失い、仮面をつけていることに気付かない悪しき「社会状態」と断ずるための経験を積んだのである。社交界で、彼は異邦人の孤独感を味わい、どんなに同化しようと努めてみても、自分がその社会にとってきわめて異質なものであること、その順応の努力が不毛であることを、幾たびも思い知らされた。¹⁷ オレーニンは、社交界にあって、心からはその要求を感じていない欺瞞に満ちた生活を当然のように送っていた。自然との内在的な関係を保っていたルソーは、社会状態に適応することができず、社会状態に慣れてきたオレーニンにとって、自然が内在化することはあり得なかった。

しかしながら、オレーニンにも、自然の内在化したルソーと同様の感覚を味わう可能性は奪われていない。コーカサスに身を落ちつけて、エローシカ叔父と狩猟に出かけた時にオレーニンの経験した感覚は、旅ではなくて散歩に特有のものであろう。もはや、オレーニンは、自然に圧倒されてその影響下に入るのではなく、自身が自然と同質な一部であることを感じている。

そして彼には、彼がロシア貴族でも、モスクワ社交界の一員でも、だれその友人だとか親類だとかいうのでは全然なくて、今、彼の周りで生きるもの達と同じような蚊か、同じようなキジ、またはシカであるのだ、ということが明瞭になった。(6, 77)

この時、自分が全一的神の一部が嵌め込まれた枠 (рамка, в которой вставилась часть единого божества) であると感じ、過去の自分が忌まわしく、気難しいエゴイストであるように思われた。この場面では、ルソーにおける自然と同様、自然が文明という社会状態の防壁となり、オレーニンのうちに一種の自然状態を現出させている。だが、外界からは断絶されつつも、ルソーのように自己の内部に閉じこもるのではなく、心は周囲に向かって開かれていく。ここでオレーニンの抱く幸福感は、孤独とは無縁である。彼は、幸福の

¹⁶ 平岡昇編『世界の名著 30 ルソー』中央公論社、1980、16頁。

¹⁷ 平岡昇編『世界の名著 30 ルソー』中央公論社、1980、18-19頁。

本質は他人のために生きること、自己犠牲にあるという結論に達する。ルソーは、孤立するために自然のうちに歩いていくが、それは社会状態に犯された人間を遠ざけることによって、本来善である人間に対する愛を回復するためでもある。オレーニンも融合に向かい、ルソーは孤立に向かいながらも、人類という同じ方向に動いていた。

オレーニンとマリヤーナとの関係の変化には、彼と自然との距離の変遷が反映している。

私は、思い出すのも恥ずかしい言葉で、彼女に自分の愛について語った。思い出すのが恥ずかしかつたのは、私は彼女にこんなことを言う権利はなかった筈だし、彼女は、これらの言葉やそれによって私が表現しようとした感情をはるかに超越していたからだ。[...] 彼女が理解しないのは、彼女が私よりも卑しいからではなく、反対に、彼女は私を理解すべきではないのだ。彼女は幸せだ。彼女は自然のように変わることなく、平静で、円満具足している。(6, 122)

オレーニンにとって、マリヤーナはまだ理解不可能で近づくことのできない存在である。これは旅人が威厳を湛えた山々を見る時に抱く感情を想起させる。オレーニンとマリヤーナの間には、超え難い深淵があるのだ。ある時、オレーニンが家に帰り、彼女を、自分の小屋を、エローシカ叔父を、そして雪に覆われた山脈を目にした時、すべてを理解したという強い喜びの感情にとらわれた。

もしかしたら、私は彼女のうちに自然を、自然の美しきものすべての化身を愛しているのかも知れない。とはいっても、私には自分の意志などなく、私を通じてその何らかの抑え難い力が私を愛しているのであり、神の創りし世界すべてが、全自然がこの愛を私の心に押し込み、そして言うのだ。愛するがよいと。私は彼女を頭でも想像によるのでもなく、私の全存在によって愛しているのだ。彼女を愛していると、私は自分が、神が創りし幸せな全世界の切り離せない一部であることを感じる。(6, 123)

想像によってまだ知らぬ女性に恋していた旅人の心境はもはや消え失せている。オレーニンのうちに抑え難い力 (стихийная сила)、神の創りし世界 (мир Божий) が入り込み、自然 (природа) がオレーニンの心に愛を押し込む。彼は、完全にその地の自然と肉体的に調和しているようだ。すでに自然が内在化しているため、もはや、自然に対して何かを期待することもない。自分の意志を失い、自然のうちに現れる神の力に従うことで、自然との間に存在した大きな距離感は消失する。それと同時に、この時には、狩猟に出た時に味わったような自己犠牲の欲求を感じてはいない。もはや、他人の幸福には無関心で、マリヤーナの愛という自己の幸福のことしか考えていない。ここでは、ルソーにおけると同様、自然のうちに孤独に向かう性向が見られる。オレーニンのエゴイズムは、彼の存在よりも大きな力によって突き動かされているため、抑制する必要がない。このように、オレーニ

ンと自然との関係は、旅人のそれから散歩者のそれへと変化するが、マリヤーナの恋人ルカーシカが撃たれた後、再び旅人の立場が逆戻りする。

ひどい嫌悪感と軽蔑、憎しみが彼女の顔に現れたので、オレーニンは、何も期待することはできず、以前この女性の難攻不落さについて考えたことがあったが、それが疑いのない真実だということをして、突如として理解した。(6, 146)

マリヤーナは、コーカサスの圧倒的な山々と同様、再び難攻不落なものとなった。それは、彼女のうちにある自然とオレーニンとの距離が増大したことを示している。

ルソーにおいて、人間と自然との関係は散歩によって得られるものであるが、『コサック』においては、旅人と自然との関係が、散歩者と自然との関係に変わるのは束の間に過ぎない。前者において、自然と人間とは対等であるが、後者において、人間は自然に何かを求め、その影響下に入ることを望んでいるのだ。ここに、自然と人間との間に階層的差異が生じることは避けられない。ここには、神と人間の階層関係が示されてもいる。人間が神の意志の体现者となる時、人間と神は対等となるが、異なる意志を持つ時、神の大きな力の前で、自己の無力さを認識する人間に立ち戻る。ルソーによれば、人間は本質的に高德の存在であるから、文明の患いから永遠に絶縁し、原初の理想に立ち返るためには、自身のうちに感情の声を、美德の声を聞くだけで十分である。

トルストイの若き日には、ロシアの農民も、また作家を取り巻いていた屋敷勤めの召使達にも、罪と贖罪、天国と永遠の破滅、聖なる生の本源たる聖三者と、救済の敵たる悪魔についてのキリスト教的理解は明白なものであった。だが、啓蒙主義者ルソーにとって、こうした概念は必要なかった。ロシア農民層の間に見られたこのキリスト教的な二項対立の図式は、この世における天国への到達を自明のものともみなしていた。¹⁸ 青年トルストイには、ルソーの著作の多くが自分で書いたのではないかと思われる程、二人の間には思想的共通点が多かった。それは、トルストイの育った貴族の環境が、こうした哲学を受け入れる土壌を準備したからだとゲーリンは触れているが、トルストイには、その反対の土壌も準備されていたのである。幼年時代に彼を取り巻いていた召使の精神的土壌は、幼い心に影響を及ぼさずにはおかなかった。トルストイは、プラスコーヴィヤ・イサーエヴナという女中について、『幼年時代』(1852)の中で、ナターリヤ・サーヴィシナという名のもとに、かなり正確に描写している。彼の回想には、この老いた家政婦に対する愛情が満ち溢れている。¹⁹

トルストイは、ルソーと同様の思想を抱きながらも、『コサック』においては、農奴達

¹⁸ Гулин. Лев Толстой и пути... С.10.

¹⁹ Бирюков. Биография Л.Н.Толстого. Кн.І. С.46-47.

に特有のキリスト教的概念を免れることはできなかった。ルソーにとって、自然の本質へと立ち返るためには散歩をするだけで十分であった。一方、トルストイは、オレーニンを文明という悪から立ち直らせ、自然的存在に戻すには、コーカサスという半ば異国の地に旅立たせる必要性を感じたのだろう。オレーニンは、そこで自身が神を顕現する一つの枠組であると感じることで、自然と一体化する。こうした場所の設定と描写には、無意識に、文明に犯された地ではなく、聖なる地でしか魂の救済はあり得ない、という農奴的な思考様式が影を落としていたのだとも考えられる。これはいわば、『神曲』におけるような地獄から煉獄を経て天国へと到るべく旅であった。ただ、『死せる魂』や『カラマーゾフの兄弟』と同様、主人公が天国に到達することはなかったのである。学生時代にトルストイは、「人間生命の目的とは、全存在物の全面的発達に関わるありとあらゆる寄与である」と記している。この場合の発達とは、自身と周囲の世界に生得の愛と善を見出し、向上させるものであるという。²⁰ しかし、『コサック』を書いた時点におけるトルストイは、愛と善にも限界を感じていたようだ。オレーニンは、一度は自然と一体化したが、自然的世界から完全に受け入れられることはなかった。それはまた、彼の意志が文明世界での生活によって、神の意志から脱落してしまったことをも示しているのだ。

3. 『アンナ・カレーニナ』(1873-77)

——自我と非我の一体化としての自然状態の反復化

『戦争と平和』(1863-69, 1873)では肯定的人物と否定的人物とが対照的に描かれており、自然的傾向を有するものとそうでないものとの関係が、はっきりとした対立的関係にある。『アンナ・カレーニナ』では、田舎に住むレーヴィンと都会人の姿が対照的に描かれているものの、彼らを善か悪かのいずれかの極には帰着させ難い。それだけ人間の性質がより複雑に描かれていることが分かる。アンナ・カレーニナの行為がトルストイによって許されたか否か、という議論に終止符が打たれることはない。夫のカレーニンは、現実を直視せずに虚構によって生きる人間として登場するが、それにもかかわらず善性を発揮する可能性は奪われていない。産褥熱にうなされ、死に瀕したアンナを目にしたカレーニンは、これまで固執していた体裁を捨ててアンナとウロンスキーを許し、二人を精神的に超越した存在となった。カレーニンはこれまで武装していた虚構の仮面を取り払い、社会状態においてのみ存在し得るアンナとウロンスキーとの不倫関係を忘れ、人間存在そのものに本質的な善の感情に身を委ねたことで、自然人に近づいたといえる。カレーニンは、国家的役人として、内面の感情を常に押し殺して生活しているが、この時には、「他者の

²⁰ Гулин. Лев Толстой и пути... С. 10.

苦しみを目にした時に生じる、あの感情の混乱の高まり (прилив того душевного расстройства, которое производил в нем вид страданий других людей) を感じており、それは、彼のうちに、本性としての自然が甦ったことを示す。それでも、農奴解放前後の複雑な社会が描かれるこの作品の登場人物においては、社会状態が自然状態に対して優位にあると言わざるを得ない。より自然的な環境に置かれているものに関しても、それは例外ではない。農場経営をいかに改善しようとしても、レーヴィンの意図は執事や農民の理解を得られず、摩擦は絶えない。貴族団長であるスヴィヤージスキーの人生観を根底まで見極めようとしても、その経営についての考え方を引き出そうとしても、彼のうちにある「知性の客間の万人に開かれているドア」より先にはレーヴィンは進み得ない。この二人の会話には、社会状態において生じる利益関係と皮相性が作用している。唯一、レーヴィンがルソー的な意味での自然状態を経験するのは、農民とともに草刈りという行為に参加する場面である。ルソーは、『孤独な散歩者の夢想』(1776-78)の中で、「無為」の中で味わった充実した存在感、つまり幸福について語っているが、これは草刈りに従事するレーヴィンの感覚とも響き合うものである。レーヴィンは、単調な仕事に従事する過程で無意識の状態に陥る時、周囲の農民と同様に上手に草を刈ることができた。そのような瞬間には仕事の苦痛も忘れ、時間と場所の感覚を失っている。ジャン＝ジャックの味わった感覚は、このような行動というよりは無為のゆえに生じたのであるが、それにしてもレーヴィンの抱いた感覚と矛盾しない。

夕方になると、島の頂きを降り、このんで湖の岸べに出て、砂地のどこか隠れた休み場所に行ってすわる。そこでは、波の響きと揺れ動く水面がわたしの官能をとらえ、心から他のいつさいの動揺を追い払って、甘美な夢想にひきかれ、しばしば夜がやってくるのも気がつかないで入る。寄せては返す水面の波、単調な、しかし時をおいて大きくなるその響きは、休みなくわたしの耳と目にふれて、夢想に消えた内面の運動にかわり、考える努力をしないでも十分にわたしというものの存在を喜ばしく感じさせてくれる。²¹

沼田裕之は、この描写について、「水の律動とジャン＝ジャックの内部の心臓の律動とが一致し、時間は経過せず、時間外の持続とでも言う可き状態が実現している。寄せては返す波はジャン＝ジャックの内奥に迄打寄せ、彼は存在しているけれども、その存在は外界の中に没入してしまっている」²² と解釈する。ほぼ同様のことがレーヴィンについてもいえるだろう。草刈りの仕事が進むに従って、「ますます多く忘我の瞬間を感じるように

²¹ J.-J. Rousseau, *Oeuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau*, t.I (Paris: Bibliothèque de la Pléiade, 1959), p. 1045.

²² 沼田裕之著『ルソーの人間観』48-49頁。

なって、その時にはもう手が鎌をふるうのではなくて、鎌自身が、たえず自己を意識している生命にみちた肉体をひっぱってゆき、あたかも魔法にでもかかったように、仕事のことなどなんら念頭にないのに、それが正しく、見事にひとりで行われてゆくのだった。」²³草刈りのリズムが体に浸透し、思考の必要性は奪われていたのだが、この無意識の瞬間こそ彼にとって至福の時であった。一律な仕事のリズムによって、レーヴィンは時間の観念を失い、いまはもうおそいのか、早いのかさっぱり分からなかったばかりでなく、百姓たちが4時間以上も休みなく刈っていたので、もう食事の時間だということにも気付かない程であった。彼は、なにか外部からの力に動かされているように感じたが、それはまさに、彼の存在が外界の中に没入していたせいであろう。

このような「自己と外界との同質的な状態」は、パリの郊外メニルモンタンで、夕方、散歩の途中犬に襲われ気を失い、夜になってから、その場で意識を取り戻す描写にも見られる。²⁴

夜は暗くなっていった。わたしは空を、いくつかの星を、それからほの明るい草原を認めた、この最初の感覚は甘美な瞬間だった。まだそんなことで自分を感じるだけだった。わたしはこの瞬間、生に生まれつつあった、そして、軽やかなわたしの存在をもってそこに認められるいっさいのものを満たしているような気がした。すべては現在にあって、なんにも思い出せない。わたしというものはっきりした観念は全然なく、わが身に起こった先刻のことも全然意識にない。自分がだれであるかも、どこにいるのかもわからない。痛みも、恐れも、不安も感じない。水の流れを見るように自分の血が流れるのをながめ、その血が自分の血であるということさえ考えようとしない。わたしは自分の全存在のうちにうっとりとするような静けさを感じていたが、それを思い出すたびにいつも、どんなに強烈な快楽の経験のうちにもそれにくらべられるものがないような気がする。²⁵

ここでは、外界と自分とが全く区別されない状態の中で、ジャン＝ジャックは、自分の目の下に流れる血を自分のものとは感じていない。また、ジャン＝ジャックは星でも、目でも、血でもないと同時に、それ等すべてのものであるという。痛み、恐れ、不安のような、意識を持った人間がこうした状態において持つ筈の感情を彼は覚え、世界と区別された自分は存在しない。M.レイモンはこれを、「自我と非我の区別、意識と宇宙の区別がなくなった」状態であるとする。²⁶ 人間として生きることは、市民社会の中で市民として

²³ Толстой. Полное собрание сочинений. Т.18. С.267.

²⁴ 沼田裕之著『ルソーの人間観』49頁。

²⁵ J.-J. Rousseau, *Oeuvres complètes*..., t.I, p. 1005.

²⁶ 沼田裕之『ルソーの人間観』50頁。

生きることであるから、自然人ジャン＝ジャックの経験した「絶対的に完全な幸福」の状態は生きた人間のものではなく、仮設的な幸福であるとみなされている。だが、サン・ピエール島で味わった幸福感とメニルモンタンでの事故の後味わった幸福感とを、同等のものとして並列するわけにはいかないだろう。これらの幸福感を抱いた状況は明らかに異なっている。サン・ピエール島という孤独を楽しむことのできる絶好の場所にあつて、ジャン＝ジャックは敢えて無為の幸福を嗜むために散歩に出るのであつた。つまり、自分で幸福感を得やすい環境を設定し、それに成功したのである。勿論、実際に得られた存在の喜びは、予想以上のものであつたかも知れない。これに対して、メニルモンタンで生じた幸福感は、偶発的な事故によって可能になったものであり、偶発性の助けさえ借りれば、市民社会でも経験し得るものである。

レーヴィンは、兄との苛立たしい会話の後、自分を静める手段として草刈りの計画を思い出した。このように、自分の精神状態を制御するための環境を設定したという点では、サン・ピエール島でジャン＝ジャックのとつた「無為」と合致する。メニルモンタンでジャン＝ジャックが偶然にも経験した幸福感は、『コサック』においてオレーニンがエローシカと狩猟に出かけた場所に、もう一度足を運んだ際に、生じた感覚と類似している。この時、オレーニンは狩りをするために森に来たのであり、旅人として何か特別なことを求めていたわけではないだろう。その意味で、彼を突然捉えた感情は、設定されたものというより偶発的なものである。

オレーニンは、森の中で突然、いわれない幸福感とあらゆるものに対する愛情に襲われた。

彼には突然、特別な明瞭さをもって、自分、ドミートリー・オレーニンという他とは異なる存在が今一人で、ただ神のみぞ知る所で、鹿が、もしかしたら人間を一度も見たことのない老いた美しい鹿が住んでいた場所、まだ人間は誰一人として座ったことも、そんなことを思いもしなかった所に横になっているのだ、という考えが頭をよぎった。²⁷

そして、彼の周りうなりを上げている百万もの蚊の一匹一匹が、オレーニンと同じ特異な存在であるように思われた。さらには、「彼は、ロシアの貴族やモスクワの社交界の一員でも、だれその親類でも友人でも全くなく、今、彼の周りで生きているような単なる蚊や、或いはキジか、鹿なのだ」ということが明らかになった。そして、ただ幸せであるために生きるべきであり、自分という存在が「不可分な神の一部が納まっている額縁」であると感じられた。つまり、メニルモンタンでジャン＝ジャックが感じたように、オレー

²⁷ Толстой. Полное собрание сочинений... Т.6. С.76.

ニンは、「自我と非我の区別，意識と宇宙の区別がない」ことを実感するのである。しかしこの場合には，草刈り時のレーヴィンやサン・ピエール島でのジャン＝ジャックのように，時間的な感覚が失われることはない。むしろ，この時起こる精神状態には，過去と現在の意識が積極的に関わっている。オレーニンは，何とも言えない幸福感とすべてのものに対する愛情を覚えた瞬間，「子供の頃の習慣に従って十字を切り，誰かに感謝し始めた」。至福のあまり，子供の頃の習慣が復活するということにも過去の要素はあるが，ここで問題となるのは感謝の情である。これは，これまでには知らなかった新たな感情を得たことに対する感謝であり，新たに獲得された精神状態とは別の，過去の精神状態があったことを示している。実際，自身が神のひとつの顕現であり，自我と非我の区別がないということを感じた時には，自身のいまわしく，幸福ではあり得なかった過去が，エゴイズムが思い出された。周囲と一体化した恍惚的な幸福状態にあっても，現在の幸福は過去の欲求や欲望と対比されている。

これに対して草刈り後のレーヴィンは，兄セルゲイとのいまいまいしい会話のことなど忘れており，ただ目の前にある瞬間を満喫しているようだ。レーヴィンの経験した状態は無意識的な覚醒であり，オレーニンのそれは，意識的な覚醒であったというべきであろう。世界との一体感を感じていることに変わりはなくとも，サン・ピエール島でジャン＝ジャックの味わった感情とレーヴィンの幸福感は，外部の律動が個人の内奥に流入することで起こっているのに対して，メニルモンタンでのジャン＝ジャックとオレーニンにおいては，彼らの内奥にある存在が外部に流出することによって融合の幸福感が生じている。沼田は，サン・ピエール島でジャン＝ジャックが経験した「いつまでも現在がつづき，しかもその持続を感じさせず，継起のあとかたもない」状態と関連させつつ，メニルモンタンでの事故後の生への誕生の瞬間もまた，時間が何物でもない，持続も継起のあとからもない状態であるとしている。さらには，未開人のように，「ただ現在の存在についての考えにだけ専念し，それがいかに近いものであっても未来についてはなんの観念もない」状態であるという。²⁸ だが，この時，ジャン＝ジャックは「生に生まれつつあった」と感じており，過去の状態から何か新しい存在へと変化したことが認識されている。「すべては現在にあって，なんにも思い出せない」ということから分かるように，むしろ過去との断絶によって新たな幸福が得られているのである。つまり，時間的な感覚と全く無縁であるとはいえない。時間的な感覚が存在するか失われているかということは，行為が繰り返されるか否かということと関係があるように思われる。レーヴィンは，自身の感情を静め様とする時に草刈りに従事し，ジャン＝ジャックにとって，湖の岸べに座り，波の響きを聞くのは一つの習慣であった。自然を神の意志と同一視するのであれば，自然状態を得るための反復行為

²⁸ 沼田裕之『ルソーの人間観』55頁。

は、自己の意志を神の意志に同調させようとする、積極的な態度の現われでもある。この場合、神の意志は、「外部の力」や「水の律動」によって象徴されると考えられる。オレーニンは、前日の鹿の足跡を探している間に言いようもない幸福感に襲われた。これは、前日の狩猟の印象によって規定された一回限りの出来事であった。そしてこの時に生じた宇宙との一体感ゆえに、マリヤーナのうちにある自然を愛し、また、オレーニンを通してより大きな自然的力が彼女を愛しているという感情を抱いた。しかしながら、自身がマリヤーナやエローシカ叔父にとって無縁の存在であることを理解し、モスクワへと出発する時には、自然との交感にも終止符が打たれる。ジャン=ジャックがメニルモンタンで犬に襲われた事故も突発的な事故であり、それが繰り返されることはない。

『コサック』において体験された自我と非我の一体性が限定的な出来事であったのに対して、『アンナ・カレーニナ』におけるレーヴィンの体験は、時間的限定性を持たぬものであった。また、『コサック』においては自然との交感が空間的な広がりを持っており、オレーニンという個人が自然のうちに拡散していったが、『アンナ・カレーニナ』においては外面的リズムが内面に入り込むことによって宇宙との一体性が感じられており、空間的には個人の内部に閉じ込められている印象を受ける。これは、『アンナ・カレーニナ』において、トルストイが人間個人の複雑性に注意を向けていたことと関係していよう。このようにルソーからトルストイへの継承性、或いは本然的類似性が明らかな描写においても、個人と自然との関係のあり方は一様ではないのだ。

おわりに

トルストイとルソーの世界観の共通性は、ほぼ自明なものとして言及される傾向があるが、トルストイはルソーの自然観をそのまま受容しているわけではない。ルソーが否定的に扱う社会状態を、トルストイは完全に否定することはなく、拒絶するわけでもない。彼はただ、人間の生活に害毒を及ぼす文明に警鐘を鳴らすのである。

トルストイは、ルソーが主張するように、人間を可能な限り社会から隔離することで自然人を培養する必要性を認めていない。『コサック』で、オレーニンは原始的な世界に身を置くことで、自然に近い人々と交流を結ぶようになるが、ジャン=ジャックのように孤独を求めたりはしていない。B.M.エイヘンバウムは、オレーニンのコーカサスという異郷の地に対する夢と現実の相違のうちに、トルストイによるロマン主義との論争を見出しているが、それだけには止まらない、としている。²⁹ この作品には、自然状態に近づこうとする積極的な立場を見出すことも可能なのである。その点、孤立によって自然状態を獲得

²⁹ Эйхенбаум Б.М. Молодой Толстой. München, 1968. С.113.

しようとする受動的なルソーの立場とは、一線を画している。

『アンナ・カレニナ』において、レーヴィンは、ジャン＝ジャックも経験したような自己と外的世界との同一性を体験する。オレーニンのように、一種自然の力に突き動かされているような感覚に陥るが、レーヴィンは草刈りという行為によって、同様の感覚を反復的に自身のうちに創造することができるのであり、自然状態を獲得する可能性が増大していることが分かる。

トルストイによれば、様々な信仰には共通する部分があり、その普遍的な宗教的基盤こそが、「人間の永遠に対する関係を確立し」(35, 164)、「人間の神に対する関係を部分の全体に対する関係として決定付ける」(35, 191)。ルソーは、サン・ピエール島での「充実した完全無欠な状態」が続く限り、人はあたかも神のように、自ら充足した状態にあると言う。オレーニン、レーヴィン、ジャン＝ジャックは、いずれも、自然という外的世界との融合によって、実は、彼らのうちに存在する神と外部の神との一体性を獲得したのだといえる。このように、『コサック』と『アンナ・カレニナ』においては、自然という概念は、文明や上流社会の対立項として現れるだけでなく、人間の内部と外部の神の合一を喚起する手段、或いは神そのものと解釈され得るのだ。

これまで、トルストイの主人公達が経験した「自然状態」へのルソー的「自然」の反映を見てきたが、それは、ルソーのトルストイに対する影響というよりも、二人の自然観の共鳴性を示すものだけということができよう。「自然」という観点は、トルストイの作品のうちに、ルソー的世界をより明確に捉えることを可能とするのである。³⁰

Толстовские герои в свете идеи «naturel» у Ж.Ж.Руссо —Анализ произведений «Казак» и «Анна Каренина»—

КАКУБАРИ Сильвия

Данная работа посвящена перекликающимся идеям о приорде в произведениях Ж.Ж.Руссо и Л.Н.Толстого. Общеизвестно, что Толстой был почитателем Руссо, и между

³⁰ 本稿は、平成19年度日本学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。

ними было много общего. Но, несмотря на множество упоминаний об этом факте, их отношениям, в особенности отношениям в литературном плане, не было уделено должного внимания. Как правило, работы, в центре которых ставится проблема отношений, ограничены моральным, философским и идеологическим аспектами.

Впрочем, необходимо отметить, что этих двух великих мыслителей сближают больше всего взгляды на природу и цивилизацию, и, соответственно, на природное и искусственное начала в человеке.

Толстой оставался поклонником Руссо всю свою жизнь, но это не означает, что характерные для Руссо темы, появляющиеся в творчестве Толстого, исходят целиком из мыслей этого французского философа. В аннотируемой статье основное внимание уделено Толстовским героям, в которых отражаются взгляды Руссо на природу и естественного человека. С этой целью проводится анализ таких произведений Толстого, как «Казачьи» и «Анна Каренина».

Показательно, что герои Толстого и Руссо подходят к пониманию природы по-разному. В повести «Казачьи» Оленину было необходимо преодолеть большое расстояние, чтобы войти в контакт с природой. Именно ощущение путешествия перенесло Оленина в другой мир. Руссо же обычно хватало прогулки для общения с природой. Решив принять участие в конкурсе на тему «Что является источником неравенства между людьми и оправдывается ли оно естественным правом?», он направился в лес со своей семьей. Руссо любил не только прогулки, но и путешествия. Однако описание путешествия по своему характеру походило скорее на прогулку.

В книге «Анна Каренина» ощущение Левина на косьбе напоминает душевное состояние Жан-Жака из «Прогулок одинокого мечтателя». Левин, на которого действует ритм косьбы, теряет чувство времени и впадает в бессознательное состояние. И Жан-Жак, который, сидя у озера, слушает монотонные звуки набегающих и отступающих волн, теряет сознание. В обоих случаях внешний ритм входит в человека и создает своего рода естественное состояние. Интересно, что и в «Казачьях», и в «Анне Карениной» персонажи испытывают такое же состояние, какое было и у Жан-Жака. Но если особое ощущение Оленина возникает случайно и однократно, то единству Левина с окружающим миром присуща повторяемость.

Таким образом, понятия о природе и естественном человеке дают возможность выявить новые глубокие отношения между произведениями Руссо и Толстого.